

フランス映画紀行

—— 映画文学人生論

池波正太郎 (1923-90)

『フランス映画紀行』 (1978) 「文藝春秋」

『青春忘れもの』 (1969) 「朝日新聞社」

『私が生まれた日』 (1972-88) 「朝日文庫」

『芝居と映画と人生と』 (1972-88) 「朝日文庫」

(ああ、随分、街が白いな……)
と、これがパリの第一印象だった

池波正太郎に『フランス映画紀行』という著書があるのを知り、意外に思った。『鬼平犯科帳』や『仕掛人・藤枝梅安』のような江戸時代の小説がフランス映画とどう結びつくのか。

そんな疑問を抱くのは私がパリや浅草を知らない田舎者だからだということが本書を読んでよくわかった。

(ああ、随分、街が白いな……) というのがパリの第一印象だったと、池波は書いている。「というのほね、昔のパリというのは、もう何から何まで真っ黒なんだ」。

池波は昔のパリを訪れたことはないが、映画を通じて知っていた。たとえば、ジャック・フェデー監督の映画「ミモザ館」は一九三五年の作で、一ヶ所だけパリの実景が出てくる。セーヌ川のところへフランスワーズ・ロゼエが、すつと車出て来る、あの場面。そのときの、背景のセーヌ川とパリはもう本当の黒に近い灰色の感じ……裏さびれたというのではなく、むしろ威圧的な暗い灰色で、がっしりした石の、重く陰鬱な感じがあのショットに出ているという。

そんなことを言われても、「ミモザ館」を観たことがない私にはピンとこないが、それでも、写真や挿絵からある程度は想像がつく。挿絵は池波が自ら描いている。

フランス映画紀行

映画文学人生論



パリの裏町、モンマルトルの丘、ジャン・ギャバンの生まれた家などの絵はほんものの画家が描いたもののように見える——いや、池波正太郎はほんものの画家なのだ。子供の頃、将来、挿絵画家になりたいと思っていたら、自分の本の装幀や挿絵が描けるめぐりあわせになった。「もし、私が、幼少のころから映画（芝居をふくめて）に親しんでいなかったら、小説や脚本を書いて生活している現在の私はなかったら」という。

ギャバンは、モンマルトルの丘の下で生れた。ロシユシヨアル街二十三番地。戦前のままのそのアパルトマンが残っていて、浅草生れ、浅草育ちの池波正太郎が描いている。

劇場、映画館、カフェ、そして芸人たち——昔の浅草の面影をもとめて池波はモンマルトルを歩いた。賑わいはモンパルナスにうつっているが、池波は古いものをもとめる。

ジャン・ギャバンと池波正太郎。共通するものは何か。芸道へのたゆまぬ精進と昔風の人情——結局、まったく新しいものなんてない。古いものからしか新しいものは生まれてこない。

私は若い頃、新しいものをもとめて、フランス語を学んだが、ほとんど何も身につけていない。実に阿呆らしく、不条理な存在だ——というのが『フランス映画紀行』の率直な読後感である。

砂浜の海の極（きわ）まで麦実り 池波正太郎